

『沙石集』諸本は本文の成立の段階により、古本系と流布本系に大別される。古本系は古い本文を持つ伝本であり、流布本系は後の改訂を経た新しい本文を持つ伝本である。この二系統に『沙石集』の主要な伝本を分類すると次のようになる。

〔古本系〕

十二帖本：俊海本・米沢本・北野本・藤井本

十帖本：梵舜本・成實堂本・阿岸本・真福寺本

〔流布本系〕

十帖本：内閣本・長享本・東大本・神宮本・岩瀬本・刊本

本稿では、最も古い本文形態を持つと考えられる俊海本を起点として、梵舜本、成實堂本の性格を明らかにし、古本系統から流布本系統へと移行する問題点を含む内閣本、長享本までを考察の対象とした。無住は弘安六年に『沙石集』を脱稿後、永仁三年と徳治三年に大改訂を施している。この二段階の改訂を受けているか否かを明白にし、『沙石集』の本文が加筆、削除、裏書等を経てどのように変化したかを考え、現存する諸伝本の前後関係を解明することを目的とした。

以下、章段ごとに概要を示す。

序章 『沙石集』伝本研究の課題と展望

まず第一節では、『沙石集』伝本に関する先行研究をまとめた。渡辺綱也による岩波日本古典文学大系解説と、小島孝之による小学館新編日本古典文学全集解説を元にして、研究史の流れを概観した。渡辺は、収録説話数の多寡により、広本と略本という分類をした上で、『沙石集』諸本は広本から略本へと説話が削除される形で成立した、と考えた。永らくその考え方が主流であったが、小島はこれに対して、成立に比重を置き、古本と流布本という分類を新たに提唱しており、本稿もこの小島の分類に従って考察を進めた。

次に第二節では、『沙石集』伝本研究の問題点について述べた。まず『沙石集』は、無住が弘安二年に起稿した後、二、三年の休筆期間を経て、弘安六年に脱稿したものであるが、休筆以前に巻のどこまで書き、休筆以後に書き継いだのはどの巻からか、ということ

が従来問題視されてきた。無住は弘安六年に一旦『沙石集』を成した後、永仁三年と徳治三年に自ら大改訂を施している。加えて後人の改訂も受け入れる姿勢を持っていたことから、結果として、無住自身の改訂と後人の改訂が入り交じった錯綜した本文ができあがり、それが『沙石集』の成立過程を考察する際に大きな壁となってきた。その中で渡辺は、無住が休筆以前に書いたのは巻五までである、という見解を示し、その根拠の一つとして、五帖本の存在をあげたのである。五帖本は、『沙石集』の巻五までの内容で終わっている伝本であり、阿岸本、吉川本が含まれる。しかしこれらの伝本が最初から巻五で終了することを目指して書かれた本であるかどうかは再検討の余地があり、同時に、梵舞本についても、渡辺により草稿本的な面影を残す本と位置づけられたが、より内容的に精査することが求められる。

第三節では、『沙石集』伝本研究の展望について述べた。『沙石集』の伝本の多様性を認めた上で、ゆるやかに諸本の成立を捉えること、また『沙石集』のその後の展開として、それぞれの時代において定番とも言える『沙石集』はどの系統を引く本であったのか、現在までの『沙石集』需要の問題にも、関心を向けていく必要性を論じた。

第一部 古本系諸本の成立―十二帖本―

第一章 俊海本概観

古本系の中で最も古い本文を持つと思われる十二帖本には、俊海本、米沢本、北野本、藤井本があるが、その中でも特に本文が古態を留めている俊海本について、考察した。俊海本は巻一・巻七・巻十上が現存しており、鎌倉多宝寺の長老俊海が所持していた本である。その伝来について確認した上で、題目を米沢本、慶長古活字本と比較した。

第二章 俊海本からの改変

俊海本の本文について、その特色を考察した。まず第一節では、巻一第十條「或浄土門行人輕神明蒙其殃事」を取り上げ、話の展開が『興福寺奏状』を基盤にして進められていることを指摘した。しかし『沙石集』の話は、『興福寺奏状』を念頭に置きつつも、無住の主張に沿う形にかみ砕かれて、『沙石集』の一話として再生しており、そこに無住の説

話集編者としての手法を見て取ることができた。また俊海本では、悪人往生に関する記述が他本に比して著しく欠けており、無住の改訂を経て、加筆されていったことを指摘した。しかしそれは、無住の悪人往生に関する知識が増大したことを意味せず、恐らくは説経等の場の要請から、より詳述する必要性が生じた結果であると捉えた。

次に第二節では、俊海本にはなく、後々加筆されたと思われる話を二話とりあげた。信西関連説話と裁判説話であるが、これらについては、加筆された意図が容易に解けず、今後に課題を残すこととなった。

第二部 古本系諸本の展開——十帖本——

第一章 梵舜本の考察

梵舜本は、渡辺綱也により草稿本的な面影を残す本と位置づけられたが、他本に比して収録説話数の多い巻六と巻八が、従来検討の対象とされることが多かった。そこでまず第一節では、巻六・巻八以外の巻について検討を加え、梵舜本の性格を明らかにすることにした。構成の問題として、巻一から巻四を考察した結果、梵舜本は米沢本よりも後出の本文を持つことが判明した。また、無住の師である聖一国師（円爾弁円）開山の東福寺との関連を考えた結果、梵舜本には東福寺関連の記事が存在するにも関わらず、米沢本にはほとんど存在しなかった。無住は晩年にかけて東福寺と関係を密にしていき、それと連動して『沙石集』にも東福寺関連記事を加筆していった可能性があり、この点からも、東福寺色の薄い米沢本が、濃い梵舜本よりも先行することが明らかであり、梵舜本はむしろ増補本であるとの結論を得た。

第二節では、巻五・巻六・巻八に焦点を当てて、梵舜本の特徴を考えた。梵舜本にのみ確認できる話は卑俗であるとの理由で、それらは後々削除されたと考えられてきたが、梵舜本には一貫したテーマとも言えるべき話の構成概念があり、削除されたと思われた諸話は、反対に増補されたものである可能性があることを指摘した。

第二章 成實堂文庫本の考察

従来考察の対象とならなかった成實堂文庫蔵江戸初期写本（成實堂本）について考察し

た。第一節では、前提として、従来五帖本として特別な価値を付与されてきた阿岸本、真福寺本、吉川本について再検討し、それらが始めから巻五までを目途として構成された本ではなく、巻十まで元々あつた本を書写しつつも、何らかの事情で途中で書写を断念した結果出来た本であることを指摘した。

第二節では、成實堂本の書誌と構成について、簡単に述べた。

第三節では、成實堂本の巻二について、米沢本、梵舜本、阿岸本との比較検討を行い、特に地蔵菩薩関連説話の異同から、成實堂本が永仁三年の改訂を経ていない本文を持つ可能性を指摘した。

第四節では、成實堂本の巻四・巻五にある裏書に焦点を当てて考察した。成實堂本の裏書は、早い段階で加筆されたタイプのもので、後の改訂で削除され、刊本等の本文には受け継がれなかったものが多いとの印象を受けた。

第五節では、成實堂本の巻九について、米沢本、梵舜本、刊本との比較検討を通して考察した。巻九は、各本に異同の激しい巻であるが、米沢本・梵舜本に比して考えると、成實堂本は改訂を加えたより新しい本文を持っており、刊本と共通する部分が多いことがわかった。なお最後に、成實堂本巻九の全翻刻を収録した。

第六節では、成實堂本の巻十について考察した。本文自体は流布本系統と同様であるにも関わらず、古本系統にしか確認できない話も収録しており、成實堂本の性格を特定するには困難が目立った。ただ『沙石集』諸本の全般の流れからすると、恐らくは古いタイプの本文を残した、古本系十帖本の一本として捉えることが適当であるが、とりわけ阿岸本、梵舜本との前後関係の判定が難しく、細かい位置付けについては今後の課題となった。

第三部 古本系諸本から流布本系諸本へ―流布本系諸本の初期的問題―

第一章 内閣文庫本の考察

内閣文庫本は、第一類本と第二類本に分類される。第二類本（巻六・巻七・巻八・巻十）は刊本とほとんど同内容の伝本である。第一類本（巻一―巻五・巻九）は、裏書を多く含むことから、従来の渡辺の分類では広本系と位置づけられたが、新しい本文を有する流布本系の一本として扱った。第一節では、内閣文庫本の書誌、本文系統について考察した。

第二節では、第一類本の裏書について詳しく検討を加えた。内閣本の裏書は、本文のど

ここに挿入すべきか指示書きを持つものがほとんどであるので、その指示が適切かどうかを中心に考察した。

第三節では、内閣本の裏書を施した人物について、無住か、後人かの判断が難しい話をとりあげ、判定を試みた。巻二の裏書にある、信西と前唐院の宝物説話と、巻三、巻五にある和歌に関する説話についてであるが、結果として、無住自身による裏書と想定して問題はないと考えた。また、無住が後々の改訂で増補していった典籍群の一例として、肇の『肇論』、『宝蔵論』を取り上げ、無住の加筆方法の一端を明らかにした。

第二章 長享本の考察

長享本は、流布本系統の中で、最も書写年代の古い本である。第一節ではその伝来について、各巻末の識語を再確認した。

第二節では、巻二く巻四の無住の識語を確認することにより、長享本は永仁三年の改訂は受けているが、徳治三年の改訂は受けていない本であることを確認した。

第三節では、まず巻三く巻五を取り上げ、長享本の本文の独自性を指摘した。巻九については、従来長享本の独自性が最も認められる巻として注目されたが、その本文を刊本との比較で考えると、極めて特殊な本文でありながら、『沙石集』諸本全般の流れの中では、あまり影響を持たなかつたのではないかとの結論を得た。

終章

本稿を総括し、各伝本における、永仁三年と徳治三年の改訂の有無を表にして示した。今後の展望としては、徳治三年の改訂を経た最終グループに含まれる、東大本、神宮本、岩瀬本の性格の特定が急務であることを述べた。

資料編

資料編として、無住関係略年表、『沙石集』説話対照目次表①②、『沙石集』和歌一覧、『雑談集』和歌一覧、内閣文庫蔵『沙石集』翻刻を収録した。

